

## M-2：科学技術社会論の観点

# URAとは何か？—科学技術社会論からの問題提起—

8月30日（水） 13:50-15:20 会場C（5階）

科学や技術の存立には、膨大なリソース供給が必要である。一方で科学、技術なくして現代文明は成り立たない。まさに社会の根幹に科学も技術も組み込まれているのである。

しかし社会と科学、技術の関係は決して安定的ではない。科学技術がもたらす豊かな生活と社会全体にわたる負の影響。科学知識の集積下に起きる人間観の変容、そして社会の枠組みそのものの動揺……。こうした問題を社会的、歴史的あるいは哲学的観点から分析し、論じるのが科学技術社会論である。「URAとは何か」も当然問われよう。

本セッションではURAとその制度に深い関心を持つ、あるいは自らURAでもある科学技術社会論者とともにこの問題を考える。URAが科学の社会的意味とその発揮方法に関する専門職であるなら、それはいかなる意味においてか。現状の制度的・認識的位置づけの彼方に新たな状況は立ち上がるのか。URAが科学への貢献を目指すほど、大学が要求するミッションとの間に齟齬を来すかもしれない。そこにはいかなるタクティクスが生じるか。

下記のプレゼンテーションはこれらの問題への切り口を提供するべく用意されたものである（タイトルはいずれも仮題）。大学や大学における研究を社会的文脈に位置づけるうえでURAが果たすべき役割が何かを含め、フロアをまじえて議論したい。

- 齋藤芳子「URAを相対化してみる——科学技術システムならびに大学組織の中で」
- 吉澤 剛「際に立つ(U)(R)A」
- 矢吹命大「URAの現場からの応答」
- 澤田芳郎（モデレータ）「URAとは何か？——論点整理」

## オーガナイザー／司会者



**澤田 芳郎**：茨城大学 学術企画部企画課 URAオフィス URA

京都大学農学部卒業後、教育学研究科修士課程修了。シンクタンク研究員から大学へ。科学社会学の立場で産学連携を扱ううちに共同研究センター専任教員に。京都大学、小樽商科大学でコーディネート活動に従事しつつ、ささやかにフィールドワーク。研究支援に徹するうえで教員たることの限界を認識し、早期退職してURA。論文に「現代社会における科学と産業～産学協同論のフレームワーク～」産学連携の分化とコーディネータ等。

## 講演者

**齋藤 芳子** : 名古屋大学 高等教育研究センター 助教

大学院までは材料学を学び、のちに科学技術社会論、高等教育論に転向。理化学研究所、文部科学省科学技術政策研究所（当時）、産業技術総合研究所ほかを経て現職に着任。著作に『大学教員準備講座』、『研究者のための科学コミュニケーションStarter's Kit』、『大学の教務Q&A』（すべて共著）などがある。URAについて2005年の報告書に取り上げたのを皮切りに、'08、'13、'17年にも著作がある。

**吉澤 剛** : 大阪大学 大学院医学系研究科 准教授

慶應義塾大学理工学部物理学科卒業後、東京大学大学院（科学史）修了。民間シンクタンク勤務を経て、2008年に英国サセックス大学科学政策研究ユニット（SPRU）にてPhD（科学技術政策）を取得。テクノロジーアセスメントや知識政策を専門とし、知識を社会的・公共的価値につなげる方法論やマネジメント、制度の研究と実践に広く携わっている。

**矢吹 命大** : 横浜国立大学 研究推進機構  
特任教員（准教授）／リサーチ・アドミニストレーター

筑波大学大学院人文社会科学研究科国際政治経済学専攻単位取得退学。修士（国際政治経済学）。2012年4月より筑波大学大学院人文社会科学研究科国際公共政策専攻特任研究員として大規模科学プロジェクトを巡る国家間関係の研究に従事。2014年4月より現職。専門は国際関係論。URAとしては科学技術政策動向調査、研究IR、競争的資金獲得支援、研究広報、サイエンスカフェ支援、競争的資金データベース開発などを担当。